

伊藤 絵里子

ITO Eriko

硯伊之助(1895–1977)(fig. 1)は、1911年、16歳の頃より日本水彩画会研究所で絵を学び、フウザン会展などで発表した。1914年、19歳のときに《女の習作》で第1回二科賞を受賞するなど、10代で画壇の注目を集める。その後、春陽会や日本版画協会でも活躍し、一時は文化学院や東京藝術大学で後進の指導にあたった。戦後は九谷焼に魅せられ、1958年、一水会に陶芸部を結成する。その後、1962年、石川県加賀市に開窯し、色絵磁器の創作に熱意をもって取り組んだ。

また、1930年代よりコローやクールベ、ゴッホなどの画集制作に携わり、1955年から約20年かけて三部冊の訳書『ゴッホの手紙』(岩波書店)を刊行するなど、西洋美術の紹介にも尽力した。美術家としての活躍以外に、師と仰いだマティスの日本における初めての回顧展(1951年)の実現にむけて、フランスで作家本人との交渉に奔走するなど実務家としての一面もあわせもつ。

さらに、裕福な出自をもつ硯は、滞欧中、自身の研究のために作品を収集してもいたため、ブリチストン美術館で開催された「西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち 1890–1940」展(1997年)でもコレクターの一人として紹介されている。硯旧蔵のマティス《コリウール》(1905年)やルソー《イヴリー河岸》(1907

年頃)といった一部の作品が現在アーティゾン美術館に収蔵されていることや、セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》(1904–06年頃)、マティス《縞ジャケット》(1914年)が収蔵品に加わる際に仲介したことでも知られており、当館にゆかりの深い作家の一人といえる。

筆者は、硯についての展覧会を準備するなかで、折に触れて硯伊之助美術館館長の硯紘一(1945年生まれ、fig. 2)氏に話を伺う機会に恵まれた。紘一氏は、硯の弟子、継承者として、硯没後の九谷吸坂窯や作品を守ってきた人物である。紘一氏が、硯と接したのは最晩年の一時期ではあるが、師と弟子たちとの共同生活に身を置いて研鑽を重ねたことから、硯本人からはもちろんのこと、先に硯の内弟子となり、後に紘一氏の妻となった海部公子(1939–2022)¹や、永井潔(1916–2008)²たち兄弟子を介して耳にしたエピソードは尽きない。これまで調査の度に筆者が伺った話は人づてに伝聞されたものも含まれるが、多方面にわたり硯の魅力を伝えてくれる内容であるだけでなく、硯について調べる手がかりも多く含まれているように感じ、それらをきちんと記録しておくべきではないかと考えた。紘一氏が共同生活を通して学んだ師・硯伊之助の創作における態度や姿勢、交友関係にまつわる思い出やエピソードなど、紘一氏にインタビュー

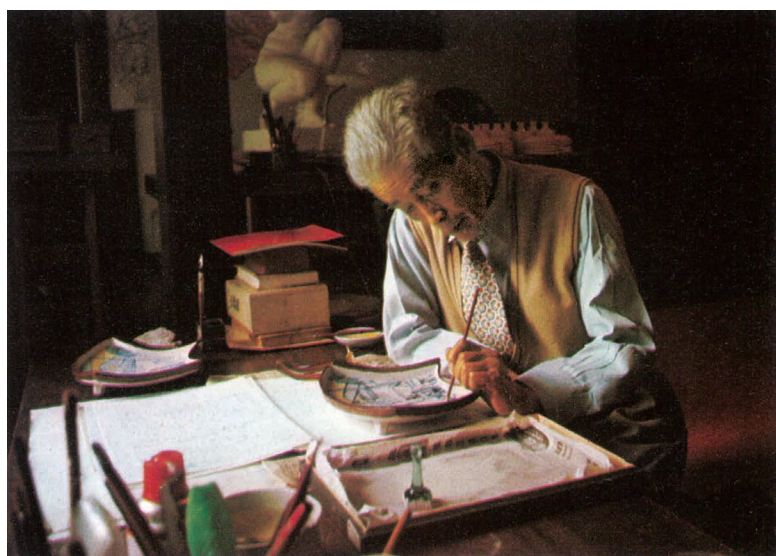


fig. 1
吸坂窯の陶房で絵付けをする硯伊之助(季刊『蓑』No.1冬季号、1975年、18頁より)。
HAZAMA Inosuke painting in the pottery of the Suisaka kiln, From the quarterly magazine *Buds*, no. 1, winter, 1975, p. 18



fig. 2
古九谷を取り扱う硯紘一、2024年7月5日。
HAZAMA Koichi dealing with old Kutani, 5th July 2024

形式で話を伺い、口述記録として残すことを本稿の目的としたい。

なお、インタビューの分量が予定よりも多くなったため、「前編」と「後編」の2つに分割し、本稿の続きとなる「碇伊之助についてのオーラル・ヒストリー 後編」については、『石橋財団アーティゾン美術館研究紀要6』(2025年)に掲載予定である。また、文中の発言内容を補う記載は[]で追記した。

碇紘一 インタビュー

2024年7月6日(土)

於 九谷吸坂窯、工房兼住居(石川県加賀市)

インタビュー: 伊藤絵里子(アーティゾン美術館 学芸員)

編集・インタビュー: 黒川典是(編集者)

碇紘一略歴

1945年 福岡県八幡市(現・北九州市)生まれ

1968年 早稲田大学第一文学部史学科東洋史専修を卒業

1968年 碇伊之助、弟子の海部公子と出会う

1971年 九谷吸坂窯入門、内弟子となる

1974年 海部公子と結婚、夫婦で碇伊之助の継承者となる

現在 陶芸家、碇伊之助美術館館長

きっかけは中国語教室

伊藤 碇伊之助との出会いからお伺いします。

碇 私は北九州の旧八幡市で生まれて、高校を卒業し、浪人中までいました。その後、東京に出て、大学卒業の前から中国語を勉強したいと思って、語学教室に通っていたときに知り合ったのが碇伊之助のところにいた女性、藤木紀子(1945年生まれ)で、彼女の紹介で碇伊之助と海部公子に初めて会ったのは六本木の碇の本家です。そのときは忙しくて玄関でちょっと紹介してもらって、言葉を交わす時間はほとんどなかったですね。だから私は印象に残っていますけど、海部は最初に会ったときのことは印象にないみたいです。私が大学を卒業したのが1968年ですが、先生たちの上京は大谷米太郎(1881-1968)³の葬儀に出るためだったので、1968年5月だったと思います。

伊藤 中国語教室は東京ですか。

碇 神田でしたね。先生を紹介してくれた女性は、その頃は本家で人が足りないの、家事手伝いも含めて東京に派遣されていたというか、六本木の碇本家にいたんです。それで時間があれば中国語でも学んだらどうだと先生に勧められたように。先生は日中友好協会[日本中国文化交流協会]関係の中島健蔵(1903-1979)あたりと交流があったので、その関係者が主催していた教室に彼女が行って、中国語を習っていたわけですけどね。

伊藤 では、その女性は一時的に六本木に住み込んでいたけれども、本来は吸坂で碇伊之助と海部さんと共同生活をして、制作活動もされていたということですね。

碇 山田隆子(1937年生まれ)さんのほうが先輩ですけど、彼女

と同じような働きですね。家事をやり、かつ制作の助手的な役割を。特に本窯は細かい仕事がたくさんありますので。

伊藤 中国語教室で知り合った女性に碇に会ってみたいかと誘われたとき、ご自身は制作をしようとは思っていなかったわけですね。

碇 全然。

伊藤 では、なぜ会いに行こうと思われたのですか。

碇 話を聞いていて、かなり関心を持ったんですけど、その彼女がまた、海部公子から教室にどういう人がいるのか、いろいろ聞かれたんじゃないですかね。それで一度連れてきなさいよ、みたいなことになったんじゃないかな。

伊藤 碇伊之助に会ったとき、どういう印象でしたか。

碇 印象といっても漠然としているけど、人間が大きかったよね。

伊藤 一瞬会っただけでも、それが感じられるような何かがあったのですか。

碇 ええ。それほど会話らしき会話をした覚えはあまりないんですけど、雰囲気として人物が大きい感じがしましたよ。

黒川 もともと美術には関心があったのでしょうか。

碇 美術部で絵を描いていましたね。中学校、高校に行ってもね。小学校のときに担任の先生からやけに褒められたことがあったな。中学のときは美術部から大会に出て、1等賞みたいなものをもらいましたよ。

伊藤 すごい。北九州の大会ですか。

碇 うん。あれはどういう大会だったのかな。

伊藤 坂本繁二郎(1882-1969)⁴にお会いになった1958年、八幡市美術工芸館[北九州市立美術館の前身]の開館記念「現代九州巨匠展」でのスケッチ大会は、中学時代の話ですか。

碇 そうそう。その開館記念展に坂本繁二郎さんが来館されたのです。中学2年生だったかな。大会じゃなくて、新聞社が記事になるように設定したのです(fig. 3)⁵。

黒川 美大に行こうとは思わなかったのですか。

碇 絵描きという職業みたいなものはあるけど、はっきり自分が行く道としてイメージできなかったんですね。それで高校2年生のときにやめたんです。それでも、高校2年の東京方面への修学旅行のとき、自由時間に上野の国立西洋美術館へ行きましたよ。

伊藤 絵描きになろうとか、陶芸の世界に入ろうとは思われていなかったけれども、大学を卒業して出会った碇伊之助の、吸坂での生活とか制作の様子を垣間見て、心動かされたのでしょうか。

碇 絵描きの生活がそこにあったんですよ、理想的な。生活が絵を描くことに直結しているわけですね。旅行するにしても写生旅行ということになって、仕事と生活が密着しているわけです。そして、碇伊之助の生活空間が魅力的だったんですよ。古民家の太い柱や梁、白い漆喰の壁に、床のフランス製タイル



fig. 3
八幡市美術工芸館でスケッチする中学時代の碓紘一に話しかける坂本繁二郎(『朝日新聞』1958年10月28日より)。
SAKAMOTO Hanjiro, talking to HAZAMA Koichi, who was in junior high school when he sketched at the Yahata City Arts and Crafts Museum (From the *Asahi Shimbun*, 28 October 1958)



fig. 4
1980年頃、焼失前の九谷吸坂窯、工房兼住居。
Kutani Suisaka kiln, workshop and residence before it was destroyed by fire, c. 1980



fig. 5
1980年頃、焼失前の九谷吸坂窯の内観。奥から海部公子と碓紘一。アーチ型の扉の奥に、碓伊之助が生前使用した私室があった。
Interior view of the Kutani Suisaka kiln, before it was destroyed by fire, c. 1980. AMABE Kimiko and HAZAMA Koichi from the back. Behind the arched door was the private room of HAZAMA Inosuke before his death.

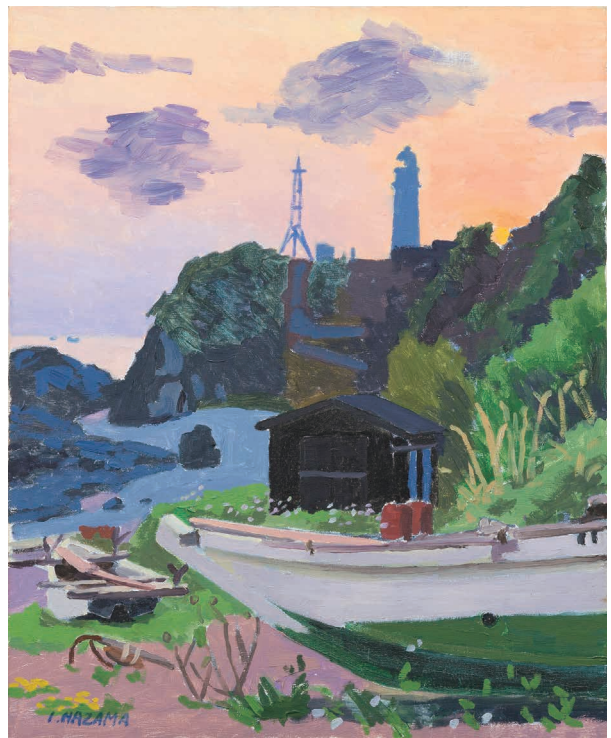


fig. 6
碓伊之助《潮岬夕照》1970年、油彩・カンヴァス、80.0 × 65.3 cm、個人蔵
HAZAMA Inosuke, *Sunset at Cape Shiono*, 1970, private collection

(figs. 4, 5)。そこに最晩年の油彩画《潮岬夕照》(1970年、個人蔵) (fig. 6)、そして《松の幹 呉須上絵大皿》(1970年頃、個人蔵)が飾ってあったのです。

伊藤 一緒に共同生活をしないと誘われたのですか。

碓 そこまでは言われなかったけど、一度来たらという感じで、九谷焼をやるために来てもらいたいみたいなことは一切なかったですよ。ひとつだけ言われたのは、一水会の陶芸部をやっているの、その事務局をやってもらえれば、あとは何をしてもいいって。それまでは木下[義謙]先生(1898-1996)⁶のところが事務局になっていたんですけど、大変だったらしくて。

伊藤 なるほど。その実務を担える人材を探していたのですね。

碓 探すというか、[事務局の仕事を任せても]いいかなと思う男が現れたので。

一水会陶芸部小史

伊藤 そのときの陶芸部での碓伊之助は、どういう立場ですか？

碓 創立者の一人ですよ⁷。毎年審査に行っていましたよ、上京して。

黒川 その際は絵の審査も？

碓 いや、焼き物ですね。油絵をいったんやめると言って、油絵描きにかなり辛辣だったので、一水会の絵画部から嫌われていたみたい。

伊藤 絵画部に戻りたいと表明したところ、戻れなかったのですよね。

碓 戻りたいと言ったら反感を買われたみたいで。復帰しなくてもよかったしね。

伊藤 でも、碓は絵画も出品したかったのですよね。

碓 発表したかったんでしょうけどね。

伊藤 日展などには、もう出せなかったんでしょうか。

碓 出さなくてよかった。きっぱりある時期でやめたわけですから。

伊藤 公募展に出さずとも、三越などの百貨店で陶芸の個展を開かれているじゃないですか。そこで絵画と一緒に並べることもできたと思うのですが、それはされなかったのですね。

碓 難しいんじゃないですか。[描いている]点数が少ないし。もともと二兎を追う気はないのです。

伊藤 なるほど。海部さんも一水会陶芸部の審査員をされていましたか。

碓 先生が亡くなってからも一水会の陶芸部は続きましたから。

伊藤 海部さんは審査員をいつ辞められたのですか。

碓 三代徳田八十吉(1933–2009)⁸が亡くなったのを機会に会の今後について話し合ったのです。そして、陶芸部を解散した。徳田さんはやり手だったから、磁器だけでなく備前なんかに人間国宝がいたりして、そういう肩書きを全面に出して展開することも考えていたみたいで、それを[十四代酒井田]柿右衛門(1934–2013)が引き継ぐ空気もあったんですけど、ここで辞めたほうがいいということで解散したんです。会の中身が変質していきますからね。

伊藤 反対の声もあったのではないですか。

碓 こちらは創立者の後継者で、権限を持っていたからね。

石井柏亭との関わり

黒川 碓伊之助について、さかのぼって時系列にうかがっていますか。

碓 どうぞ。

伊藤 二科会[二科美術展覧会]では第1回展(1914年)と第5回展(1918年)の2度、二科賞を受賞しています。第1回展のときはまだ19歳で、若くして注目されましたけれども、1936年にわりと早いタイミングで退会してしまいました。そのあたりの退会の理由を聞かれたことはありますか。

碓 いや、直接はありませんが、滞仏中の先生が帰国する林しずえ倭衛(1895–1945)に一任したと他所から聞いています。

伊藤 1926年に春陽会入りを決め、結果二科を除名されることとなった1度目の退会の話ですね。ところで、1938年には陸軍省嘱託画家として、石井柏亭(1882–1958)たちと一緒に中国・華北に滞在。1940年にまた陸軍省嘱託画家として中支方面の杭州(臨安)に滞在したということですが、戦争中の制作について何か伺ったことはありますか。

碓 ないですね。

伊藤 中国滞在中の話なども全然されなかったのでしょうか。

碓 何か質問しちゃ悪いような気もあったのかな、あまり意識してないけど。

伊藤 聞いてはいけない雰囲気があったのですか。

碓 いや、そんな感じでもないけど、軍からの派遣で日中戦争下の中国に行って、戦争遂行のための絵を描くわけですから。石井柏亭のことは全然よく言っていないだね。

伊藤 でも、碓にとって最初の絵の先生ですよ。

碓 そうそう。日本水彩画研究所にいた先生なんでしょうけど、何か気に入らなかったらしいよ。一緒に一水会でやっていたわけですけどね⁹。

伊藤 碓は、石井が結成に関わっている二科展へ出品し、その後一緒に創立した一水会で活動しました。さらに、1941年には文化学院の美術部長になります¹⁰。

碓 ずっと因縁があったただけだね。

伊藤 文化学院の職は、てっきり師である石井柏亭の引き合いがあったのだと思っていました。

碓 あったかもしれないよね。

伊藤 だから恩義を感じていると思っていたので、意外でした。

碓 いや、ぼろくそに言ってますよ。「日展と一水会の立場」というのが『碓伊之助文集』(碓伊之助美術館、2024年)に入っていますけど¹¹。

絵画から陶芸へ

伊藤 1942年には三彩亭の号を用い始めますけれども、三彩亭という名前の由来についてお聞きになったことがあれば教えてください。

碓 いや、それも全然。

伊藤 三彩亭という雅号は、九谷焼を始めてから使われた名前ではなく、絵画の裏側にも書いてあったりするので、画家としての雅号のようなものとして使われ始めたと考えていいんでしょうか。

碓 そうそう。

伊藤 そうなると、絵画から陶芸へ移行したのはいつ頃でしょうか。1951年に小松に滞在して、九谷焼を見に行ったりし始めますけれども、実際に自分で作り始めたのはいつですか。

碓 1951年じゃないですか、ヨーロッパから帰って。ローマに行ったときにスケッチして作ったサンタンジェロ城のお皿(fig. 7)。それが最初の頃のひとつです。うちにそのスケッチがあります。

伊藤 その完成した作品自体はどこにあるのですか。

碓 たしか塩原文二(1909–1978)さん¹²が持っていた。油絵なんかを描いていた人で、九谷焼も作っていた。一水会の出品者でもあったようだけど、画家というより学校の教師をしていたかな。[先生が]小松に通っていたとき世話になったから、あげた

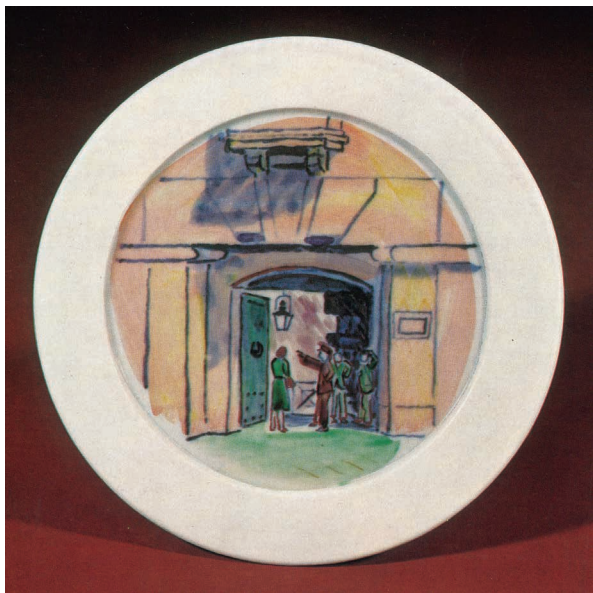


fig. 7
 碓伊之助《九谷染付上絵皿 羅馬サンタンジェロ城》1951年頃
 1952年2月、第5回日本アンデパンダン展出品。
 HAZAMA Inosuke, Kutani overglaze enamelled plate, Castle Sant'Angelo, Roma,
 c. 1951. February 1952, exhibited at the 5th Japan Independent Art Exhibition

んじゃないですかね。

伊藤 滞在の手配などをして下さっていた方ですか。

碓 そうそう。[初代]徳田八十吉(1873-1956)さん¹³とも親しかったと思いますけど、他の九谷焼の職人さんたちともつないでくれて。

伊藤 『一水会史』(一水会、1983年)に掲載された中村琢二(1897-1988)¹⁴の回想文によると、琢二の兄で画家の研一(1895-1967)が買ってきた九谷焼の皿を家に飾っていたところ、来訪した木下義謙(よしのり)が目にして、金沢の陶芸家を訪ねたり、作品を見てまわるきっかけになり、ヨーロッパから帰国した碓もそれに加わって大変興味をもつことになったということでしたけれども¹⁵、中村琢二、研一の二人については何かお聞きになったことはありますか。

碓 中村研一さんとの関わりについては聞いたことないけどね。光風会と一水会の[美術家たちの]出品でだいたい日展は成り立っていたようだから、審査のときに中村がボス的に横柄な振る舞いで、[碓と]何かやり合ったらしいですよ。だから、よくは思っていないんですわ。それは「日展と一水会の立場」の文章のなかに出てきますよ¹⁶。先生に会った頃、「君はどこの出身？」と聞かれたので、「福岡県」と答えたところ、[中村と同郷ということ]で渋い顔をしていました。

伊藤 でも、研一の弟、琢二とは仲がよかったんですよね。

碓 琢二さんの作品は認めていましたよ。碓伊之助の[油絵]作品を所望してきた人に、自分は今制作していないので、ということで琢二さんを紹介したことがあります。

黒川 いずれにしても焼き物を始めた時期は1951年ということですね。

碓 そうです。木下義謙さんに、焼き物に関心があるので、ど

こかい窯はないか調べてくれないかみたいなことでね。そうしたら、九谷がいちばん合っているだろうということで。

黒川 焼き物に関心を持ったきっかけについては何か聞いていますか。

碓 いや、聞いてない。文章に残していますが、絵具の問題もあったし、古九谷は日本の色彩絵画ですから。

伊藤 戦時期の油絵具の色が、変色してしまってショックだったということは書いていますね。紫色の藤の花が赤藤になってしまったり、《黄八丈のI令嬢》(1946年、東京国立近代美術館)(fig. 8)についても、着物や背景の色がまるで変わってしまったと文章「油絵への訣別」のなかで触れていました¹⁷。

碓 もう本場のブロックスの絵具は入ってこないし、ナチスにベルギーの絵具工場が破壊されたいという情報もあったりして。絵具の問題が大きいよね、どうしても絵描きは。

伊藤 石塚二味子さんを描いた《黒服のI令嬢》(所在不明)を1942年の文展[文部省美術展覧会]に審査員として出品していますよね。1946年の第1回日展には《黄八丈のI令嬢》を出していて、文展、日展に出品したのは絵具の配給など、そういったこととも関係していたのでしょうか。

碓 発表できる場があれば、それほどこだわりはなかったんじゃないですかね。

黒川 先ほど中村研一のボス的な態度に批判的だったとおっ



fig. 8
 碓伊之助(三彩亭)《黄八丈のI令嬢》1946年、油彩・カンヴァス、
 80.5 × 65.0 cm、東京国立近代美術館
 HAZAMA Inosuke, Miss I in Yellow Silk Kimono, 1946,
 National Museum of Modern Art, Tokyo
 Photo: MOMAT/DNPartcom

しゃいましたけれども、碓伊之助は権威主義的なものに対して嫌悪感があった人だったんですか。

碓 そこははっきりしていましたね。先生が青春時代に愛読したのは、クロボトキン(1842-1921)の『相互扶助論』、『パンの略取』でしたから。

伊藤 二科会是在野のグループで、文部省が主催する官設の展覧会から飛び出すかたちでつくられたので、二科展に出品していた人たちは当初文展には出さなかったし、出せなかった。ですから、二科展の第1回から出品して活躍していた碓が、文展や日展に出品することに抵抗はなかったのか気になりましたけれども、その辺は何もおっしゃってはいませんでしたか。

碓 特にないですけどね。二科を脱会して、のちに一水会をつくった。一水会と文展の関わりのなかで発表する場があればと思ったんじゃないですか。その後の二科会を気に入らなかつたらしいけどね。東郷青児(1897-1978)とか。

伊藤 確かにこの時期の二科会は、より一般の人たちに受け入れられるようにという一面が強くなる傾向にあったので、創立時のメンバーたちが離れていく要素はあったかもしれませんね。

黒川 日展だからというよりも、組織が変質すると離れていくようなところがあったんですかね。

碓 それは大きかったと思います。10年もすれば、会は変質すると言っていました。

碓伊之助と中国

伊藤 1944年に東京美術学校(現・東京藝術大学)で油絵の実技を教える仕事に就かれた。

碓 主にデッサンと聞いていますよ。

伊藤 油画科(現・絵画科油画専攻)でデッサン指導をしたのですね。

碓 ええ。安井曾太郎(1888-1955)教授の下で助教授として、安井さんに誘われたんですよ。

伊藤 たしか碓が安井に美校へ来ないかと誘われているところに同席した人がいて、その方に話を聞いたとおっしゃっていましたね。

碓 村口書房の村口四郎(1909-1984)という人です。海部と訪ねたときに言っていましたよ。碓と安井の席に自分もいて、安井さんが「君と一緒にやれば改革できる」と盛んに言っていたて。

伊藤 東京美術学校出身ではないのに誘われたということは、安井が碓のデッサン力、才能を認めていたことになりますよね。碓は、安井については何か言っていましたか。

碓 はっきり言わないけど、安井さんは京都の出だから、ちょっと肌に合わなかったみたい。自分は江戸っ子だからね。

伊藤 安井の仕事は認めているけれども、その真面目すぎるところはあまり肌に合わなかったという、そんな雰囲気でしたか。

碓 そうそう。ただ、中国婦人[モデルは、チャイナドレスを着た小田切峰子]を描いた肖像画があるでしょう。

伊藤 東京国立近代美術館の《金蓉》(1934年)ですね。

碓 あの作品なんかはそれほど評価していなかったわ。どこが問題なのか聞かなかったけど、ちょっとこれ見ようがしたいなところがあるじゃないですか。柔らかい、優しい感じじゃなくて、わりと強い感じが。他の作品、例えば、人物画などで性格を誇張、強調している、わざとらしいもの、ああいうのを先生は良しとしないのです。

黒川 《金蓉》の話の流れでひとつお聞きします。1950年に国慶節で中国に行ったり、何度か中国を訪れていますが、中国に対する印象など聞いたことはありますか。

碓 その当時、建国当初の中国を訪問して文章を残していますけど、かなり好意的です。

黒川 国慶節は中国側から招待されたと考えていいですよ。

碓 もちろんそうですし、そのときの窓口は日中文化交流協会ですから、中国側からそこに打診してきたんじゃないですか。断った人も知っていますよ。先生は中国が好きだったんですよね。堂野前種松(1871-1956)先生¹⁸を通じて漢文や中国文化に接していたので。もちろん戦争中も行っていますが、喜んで引き受けたのではない。美術方面の代表者みたいなかたちで選ばれたのです。

伊藤 中国から招待されるというのは、弟子の永井潔さんの関係もあるのですか。

碓 永井さんとは関係ないです。学習院の安倍能成(1883-1966)が団長で、各分野の人たちと15人で。

伊藤 この写真(fig. 9)の方々ですね。1954年の中国訪問学術文化視察団。

碓 そうそう。[参加者のなかに]法学者の戒能通孝^{かいのう}(1908-1975)、『世界』編集長の吉野源三郎(1899-1981)、小説家の阿部知二(1903-1973)とかね。



fig. 9
1954年、中国訪問学術文化視察団として中国を訪問。
右から碓、3番目が団長の安倍能成。
Academic and cultural delegation to China, 1954. The rightmost one is HAZAMA, the third from the right is the leader, ABE Yoshishige.

東京藝大の辞職と3度目の渡仏

伊藤 1950年に東京藝術大学助教授の職を辞して渡仏されますよね、マティスに招いてもらうかたちで。

碓 マティスから手紙をもらったのがきっかけですけどね。いつももらったかわかんけど、辞める前にもらったんでしょうね。

伊藤 辞めた理由に関係しているのではないかとされるエピソードについては、永井潔さんが書かれていますけれども、そのときのことについてお話を聞かれていますか。

碓 いや、聞いてないね。ほとんど会話みたいなものはないというか。食事は常に一緒だったけど、海部を通しての話が多かったよね。

伊藤 弟子仲間が何人かいて、先生はこう言っていたという感じで、海部さんがみんなに伝えてくれるのですか。

碓 そういうケースもあるし、先生がいろいろな考え方をみないなことを[海部に]話すのをそばで聞いていましたよね。

伊藤 碓館長が私に送ってくださった永井潔さんの記事によると、井の頭線の渋谷駅で先生が永井さんにばったりと出くわして、永井さんが今から「参議院会館で共産党幹部と文化人の懇談会が開かれます」「先生も如何ですか」と誘い、一緒に行くことになった。そこで、碓は、戦後、重要な古美術作品が海外にどんどん流出したり、絵巻が裁断して売却されるのを誰も止めないことを憂い、重要な美術品は「人民管理」すべきであると発言したそうです¹⁹。永井さんによれば、「人民管理」という語は一種の流行語であったけれども、その言葉が独り歩きしてしまい、新聞『アカハタ』に一面で報じられたり、アメリカの新聞にまで共産党を支持する文化人として掲載され、事が大きくなってしまったと。その出来事が、大学を辞めたことと関係しているのでしょうか。

碓 そう書いていました？

伊藤 はい、いただいた記事に。

碓 それ、1950年なの？

伊藤 いえ、戦後ということだけで、詳しい時期まで書かれていません。

黒川 その時期だとすれば、6月に朝鮮戦争が始まっているし、共産党系の動きを警戒していた時期でもあると思うので、そういう可能性もある気はしますね。

碓 直接は聞いてないですけど、それあったと思うな。レッドパージじゃないけど、松川事件[1949年8月]とか起こる時期で、朝鮮戦争だし、そういう空気は感じていたと思いますよね。

黒川 海外渡航は自由化されていないから、何か理由がないと行けなかったはずなので、マティス(1869–1954)からの手紙が招待状みたいなかたちでフランスに行くことができたということかもしれないですね。

碓 マティスの手紙を見せたらいいですよ、外務省の知り合いに。そうしたら有効だということになったんだよね²⁰。



fig. 10

左から、碓伊之助と海部公子、碓絃一。1974年「碓伊之助展」会場にて(和歌山県立近代美術館)。

From the left to the right: HAZAMA Inosuke, AMABE Kimiko and HAZAMA Koichi, at the exhibition of HAZAMA Inosuke, 1974, The Museum of Modern Art, Wakayama.

本インタビューの続きは、「碓伊之助についてのオーラル・ヒストリー後編」として、来年、2025年刊行予定の『石橋財団アーティゾン美術館研究紀要6』へ掲載予定である。

(公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館 学芸員)

註

1. 横浜市生まれ。1955年、16歳の頃に碓と出会い、1959年に内弟子となる。1961年、石川県加賀市吸坂町を初めて訪れる。1968年、一水会賞受賞。1974年、柳井絃一と結婚、夫婦で碓の継承者となる。同年、一水会陶芸部審査員。2022年、逝去。
2. 第一高等学校中退後、碓に師事。二科番衆技塾、本郷美術研究所に学ぶ。1946年、日本美術会創立に参加。碓が委員長を務めた際、永井は書記長や事務局長を務めた。一水会会員。児童書の挿絵も多く手がけた。
3. 富山県出身。大谷重工業、ホテルニューオータニの創業者。1960年頃、吉田実富山県知事の紹介で、碓と海部は大谷と知り合う。大谷は海部に「あなたが来れば、ぼくは100万ずつ用意しておくよ」と言い、実際、海部は大谷を訪ねる度に100万円を受け取ったという(小室亜希子「#9 海部公子という生き方」『note』2021年8月16日)、URL: <https://note.com/akikokomuro/n/n156ac08e1703>
4. 坂本は、1921年の渡仏時に、碓、小出樗重、林倭衛と同船。1924年、帰国前に碓の滞するブザンソンを訪問。郷里へ戻った後、八女市へ移る。亡くなる前月、1969年6月に、九州へ写生旅行に訪れた碓と海部による見舞いの訪問を受けた(碓伊之助「井伏鱒二宛書簡」1969年6月21日消印)。
5. 「中学生の写生も見物 坂本画伯 ひょっこり八幡へ」『朝日新聞』1958

年10月28日。

6. 1921年、第8回二科賞受賞。円鳥会や1930年協会でも活動し、1928年渡仏、サロン・ドートンヌなどへ出品。1936年、兄で洋画家の孝則や 裕とともに一水会結成に参加。1947年、女子美術専門学校(現・女子美術大学)の教授となる。1950年より陶芸制作を始め、1958年、裕と一水会陶芸部を創設。裕同様、両親が和歌山県出身。
7. 一水会陶芸部は、1958年、裕の提案により、荒川豊蔵、十二代今泉今右衛門、金重陶陽、木下義謙、十二代酒井田柿右衛門、藤原啓が集まり、創立された。
8. 初代、二代徳田八十吉である祖父、父に師事し、釉薬の調合や上絵付けの技法を習得する。1962年、第24回一水会賞(陶芸部)受賞。1964年、一水会会員。1988年、三代徳田八十吉を襲名。重要無形文化財「彩釉磁器」保持者(人間国宝)。
9. 1936年、有島生馬、石井柏亭、木下孝則、木下義謙、小山敬三、裕、安井曾太郎、山下新太郎により一水会が創立された。
10. 1925年、文化学院に本科と美術科を備えた大学部が新設された際、石井柏亭は初代美術部長を務めている。
11. 裕伊之助「日展と一水会の立場」『中央公論』(1957年12月号、中央公論社)は、『裕伊之助文集』(裕伊之助美術館、2024年、563-569頁)に再録。
12. 油絵を木下義謙、陶芸を初代徳田八十吉に教わる。1960年、第22回一水会賞(陶芸部)受賞。1961年、一水会会員。
13. 古九谷、吉田屋窯の作品に惹かれ、釉薬の研究を進め、濃い紺色と紫色を主体とする深厚釉(しんこうゆう)を開発。古典文様の組み合わせと、写生に基づく絵付けを施す独自の作風が評価される。晩年、裕や中村研一、木下義謙ら洋画家たちに九谷焼の制作方法について教えた。
14. 1930年、二科展初入選。同年、安井曾太郎に師事。1939年、一水会賞受賞。裕から新聞の挿絵の仕事を度々廻してもらう(中村琢二(談)「裕さん」『一水会史』第一巻、一水会、1983年、159頁)。
15. 中村琢二(談)「裕さん」『一水会史』第一巻、一水会、1983年、159-162頁。
16. 前掲註11。
17. 裕伊之助「油絵への訣別 一工芸家一年生一」『藝術新潮』第5巻第2号、新潮社、1954年2月、170-171頁。
18. 小学校教員を経て、和歌山県有田郡湯浅町長、和歌山県会議員を務めた。1913年に有田鉄道株式会社を創設、自ら社長となり地方開発に貢献するが、業績不振のため全財産を失う。東京で美術商を営み、そのかたわらで金石学を修め、ことに中国殷時代のものにいたっては造詣の深いものがあった。1919年より数年かけて、法隆寺金堂壁画を模写。ヤマサ醤油の復興に尽力し、会社顧問となった(『湯浅町誌』湯浅町役場、1967年、842-843頁)。
19. 永井潔「裕先生と古美術」『裕伊之助美術館友の会会報』第25号、裕伊之助美術館、2004年、3頁。
20. 裕伊之助「わが半生記」12,13『北國新聞』5面、1977年1月27日(木)、29日(土)。